

2017 年金 3: 秋学期講義 現代哲学講義、認識論
講義題目：共有知とは何か？

第 3 回講義 (20171020)

3 協力関係 (cooperation) と集団的承認 (collective recognition) の区別

サールは、集団的志向性を 3 段階で考えている。

- ① 集団的志向性の前言語的形式 (人と動物) ground-floor form (p. 50)
- ② 会話の集団的志向性 「会話をするのに約束をする必要はない」 (p.50)
- ③ コミットメント、約束 (creating a commitment by making a promise)
(①から two floors up. p.50)

前回説明した協力関係の例 (自動車のエンジンをかける例、ピアノとバイオリンの二重奏の例) は、本格的な協力関係 full-blown cooperation の構造を示すものであった。協力関係では、we-intention を I-intention に還元することは不可能だとされた。協力関係は上の③に属するものと考えられる。

これに対して「集団的承認」(collective recognition)は、はるかに弱い集団的態度 collective attitudes である。(結論を言えば、集団的承認では、we-intention を I-intention に還元可能である。そして、集団的承認は、集団的志向性②とは区別される。)

集団的承認とは何か

「たとえば、実際の取引において、私があるものを誰かから買い、彼らにお金を手渡し、彼らがうけとるとき、私たちは本格的な協力関係をもつことになる。しかしこの志向性に加えて、私たちはこの取引に先んじてまた取引の後も続いて、私が売り手に手渡すある思念に対する態度をもっている。私たちは、その紙片をお金として承認する或は受容する。そしてもちろん、私たちは商取引の制度と同じように、お金に関する一般的な制度を受け入れている。一般的論点としては、制度的構造は、それが機能するために、制度の参加者による集団的承認を要求する。しかし、制度の中でも特殊な取引は、私が記述したような種類の協力関係を要求する。」(pp. 56, 57)

別の例でいうと、結婚しようとしている人は、実際に結婚する前に、結婚制度を受容している。

「本格的な協力的集団的志向性は、しばしば、制度を創造するために必要である。」(57)
しかし、「制度的構造の中で、協力関係が生じるためには、制度の集団的承認ないし受容がなければならない。」(57)

集団的承認では、We-志向性は、I-志向性に還元可能である。

「協力関係は、協力するために集団的志向性を要求する。しかし集団的承認は、協力関係の形式を必要とせず、したがって、協力のために集団的志向性を要求しない。」(58)

「もしあなたが、あるものをお金として集団的承認するならば、その集団的承認は、<各人がお金を承認し、参加者の間に、彼ら全員がお金を承認していることの相互知識がある>という事実によって構成される。」(p.58)

集団的承認は集団的志向性をもたない。

ハーバード・ビジネススクールの Case 1 は、協力関係はないが、貨幣制度の集団的承認はあるとサールは述べている(58)が、しかしそこには「私の意味での集団的志向性はない」(48)と述べられていた。したがって、集団的承認は、集団的志向性ではなく、上記の集団的志向性②でもないだろう。

コメント：二つの疑問点

(1) サールは、社会制度は、しばしば、協力関係によって創造されると述べていた。したがって、そのような社会制度への集団的承認は、協力関係に基づいている。

社会制度創設の時に協力関係があること、社会制度そのものが協力関係であること、この二点から、社会制度の集団的承認のものもまた集団的志向性（つまり we 志向性が I 志向性に還元できないような志向性）であると言えないのだろうか？

(2) サールは、会話は、集団的志向性であるという。(サールは、見知らぬ人に「Dwinelle ホールに行くにはどうすればよいですか」と尋ねて、相手が「私は英語が話せません」と答える時ですら、集団的志向性が成立している (p.50) と述べている。)

お金への集団的承認が成立している場合、つまり<各人がお金を承認し、参加者の間に、彼ら全員がお金を承認していることの相互知識がある>という場合には、お金を承認していることについての会話が潜在的に成立していると言えないだろうか？

サールは、もちろんこの二つに「No」と答えるだろう。

4 We-Intentionality による協力関係 Cooperation の再検討

ここで、協力関係の場合の We 志向性の I 志向性への還元不可能性の説明を再検討したい。

共同行為と個人行為が因果関係にある例

私が車を押し、あなたがクラッチを踏んでおいてスピードが出たらはずすことによって、二人で車のエンジンをかけようとするでしょう。(車のエンジンをかけるという集団的行為を B、車を押すという私の個別の行為(singular act) A とすると次のようになる。)

ia collective B by means of singular A (this ia causes: A car moves, causes: B engine starts)

個別の行為 A を手段とする集団的行為 B の行為内意図 (この行為内意図: A[自動車が動く]が B[エンジンがかかる]を惹き起こす)

このとき、私は次の信念 (Bel) をもっている。

Bel (my partner in the collective also has intentions-in-action of the form (ia collective B by means of singular A (this ia causes: A clutch releases, causes: B engine starts))). (p.53)

信念 (集団における私の相手もまた次の形式の行為内意図をもつ (個別の行為 A を手段とする集団的行為 B の行為内意図 (この行為内意図: A[クラッチが離れる]が B[エンジンがかかる]を惹き起こす)

ここでは、私は ia という集团的行為内意図、つまり集团的志向性を持っている。この集团的志向性は、私の頭の中に存在する。この時私は同時に、上記の信念(Bel)ももつ。この信念は集团的信念ではなく、個人的信念であろう。

この説明では、私をもつ集团的志向性と相手を持つ集团的志向性は異なる内容を持つ。なぜなら相手をもつ集团的志向性は、次のものだからである。

個別の行為 A を手段とする集团的行為 B の行為内意図（この行為内意図：A[クラッチが離れる]が B[エンジンがかかる]を惹き起こす

ここでいう「集团的志向性」は、数的に一つの集团的志向性ではないし、数的には複数だが内容は全く同じ集团的志向性というのでもない。数的に複数であり、かつ内容も各人であることなるものである。これを「集团的志向性」にしているのは、目標 B が数的に一つであることだろうか。

これで集团的志向性が成立しているのならば、つぎの例もまた集团的志向性がせりつしていることになってしまうだろう。

X は R 王国の住人である。X は、革命を起こして、共和制にしたいと考える。そのために、X は、政治的パンフレットを印刷しようとする。彼は国内には同調者がたくさんいて、パンフレットを配ってくれれば、間違っても信じている。

個別の行為 A を手段とする集团的行為 B の行為内意図（この行為内意図：A[政治パンフレットを印刷する]が B[R 王国が共和制に変わる]を惹き起こす)

このとき、X は次の信念 (Bel) をもっている。

信念 (集団における私の仲間もまた次の形式の行為内意図をもつ (個別の行為 A を手段とする集团的行為 B の行為内意図 (この行為内意図：A[政治パンフレットを配る]が B[R 王国が共和制に変わる]を惹き起こす)

この条件がそろっても、集团的志向性が成立しているとは思えない。サールは上記の説明で、集团的志向性と個人的志向性の関係を整合的に示せたかもしれないが、集团的志向性が成立していることを示せていない。したがって、また集团的志向性が個人的志向性に還元不可能であることも示せていない。

この反例で考えるならば、少なくともこの「信念」が相互知識ないし集团的信念になっている必要があるだろう。

上記の自動車のケースを、サールの理解する前述の還元モデルで表現すると次のようになるだろう。

X と Y が一緒にエンジンをかけようと意図するのは、次の時その時に限る。X はエンジンをかけるための彼のパート[自動車を押すこと]を行おうと意図し、Y も、彼のパ

ート[クラッチを操作すること]を行おうと意図し、各人が他者の意図について相互信念を持っている。

ちなみに、「意図についての相互知識（共有知）（ないし信念）が、二人の間に出現するのは、各人が意図し、また各人が他者が意図していることを知っており、また各人は、他者がそれを知っていることを知っており、また他者がそれを知っていることを各人が知っていることを各人が知っており、そのように無限につづく場合である。」(p.46)

集団的行為内意図についての相互知識を書き込むと次のようになる。

X と Y が一緒にエンジンをかけようと集団的に意図するのは、次の時その時に限る。X はエンジンをかけるための彼のパート[自動車を押すこと]を行うことによって、エンジンをかけるといふ集団的行為内意図をもち、Y も、彼のパート[クラッチを操作すること]を行うことによって、エンジンをかけるといふ集団的行為内意図をもち、各人が他者の集団的行為内意図について相互信念を持っている。

もし（サールが想定しているように）相互信念が、個人的志向性に還元できるものだとするならば、この立場は、We 志向性を I 志向性に還元する立場になるだろう。

（サールは、集団的承認を還元モデルで説明できると考えているので、相互信念ないし相互知識についての、還元モデルの説明が可能であり、場合によっては、還元モデルの説明は有効だと考えている。）

<ミニレポート課題>

- ・ We 志向性は、I 志向性に還元できるでしょうか？
- ・ もし私的言語が不可能であるとすれば、言語の規則に従うことは、複数人間がいて初めて可能になるはずで、それは、言葉の使用を I 志向性だけでは説明できないということだと思われませんが、どう考えますか？